

國學院大學學術情報リポジトリ

現代の「天下祭」に関する予備的考察：  
神田祭と山王祭の都市祝祭論・序説

|       |                                                                                                         |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2024-10-31<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 秋野, 淳一<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/0002001070">https://doi.org/10.57529/0002001070</a>                   |

## 現代の「天下祭」に関する予備的考察

―神田祭と山王祭の都市祝祭論・序説―

秋野 淳 一

### はじめに

平成三十年（二〇一八）は、明治維新百五十年にあたったが、五十年前の昭和四十三年（一九六八）、東京の神田祭と山王祭は明治維新百年を記念して、同じ年に実施された。神田祭と山王祭は、江戸時代は徳川將軍が上覧する「天下祭」として知られ、一年交替で行なわれてきた。

昭和四十三年当時、國學院大學日本文化研究所の研究員であった宗教学者の藺田稔（現・京都大学名誉教授）は、神田祭と山王祭の調査を行ない、「祭と都市社会―「天下祭」（神田祭・山王祭）調査報告（二）―」としてまとめ、神田は「脱地域化」が起こりにくい社会的な性格を持つことを指摘した。<sup>①</sup>当時の神田は、商人・職人の町で、町内の青年が中心となり神輿を担いでいた。

その後、神田は中高層ビルの町へと変貌した。昼間人口は増加したが夜間人口は減少し、町内の祭りの担い手が不

足した。社会学者の松平誠は、平成四年の神田祭調査をもとに、「都市祝祭伝統の持続と変容―神田祭による試論―」としてまとめ、神田では脱地域化が進み、神輿の担ぎ手はさまざまなネットワークを通じて参加する町外の人や企業、女性、神輿同好会などに頼るように変化したことを明らかにしている<sup>(2)</sup>。

そして、再開発に伴いマンションが建つと夜間人口は増加に転じたが、マンションの新しい住民の祭りへの参加は必ずしも進んでいない現状がある。

こうした地域社会の実態があるにもかかわらず、神田祭や山王祭といった大都市の神社祭礼が、なぜ現代の都市空間のなかで盛んに行なわれているのであろうか。都市化や情報化といった社会変動によって伝統的な祭りが衰退する印象を持つかもしれないが、眼前で起こっていることはその逆なのである。この事実をどのように捉えればよいのであろうか。

そこで、筆者はまず、先行研究が複数存在し、先行研究との比較に基づく実証的な調査研究が可能な神田祭を対象とした。平成二十五年と平成二十七年の神田祭調査を中心として、戦後地域社会の変容と都市祭りの視点から、都市祝祭としての神田祭についての考察を試みた。

その結果、現代の神田祭が賑わいを形成する要因として考えられる五つの特徴（要素）が明らかになった。すなわち、①「都市祝祭と町内の祭りの複合構造」、②「結集のための核の存在」、③「個人の活躍（人的要因）」、④「企業の参加」、⑤「非日常化するイベント」である。そして、この五つの特徴を中心に都市祝祭としての神田祭の動態を、図1の「神田祭モデル」（正式名「神田祭にみる都市祝祭モデル」）としてまとめ、他の都市祭りとの比較検討の土台を提示した<sup>(3)</sup>。

本稿では、この神田祭の五つの特徴（「神田祭モデル」）をベースとして、今度は、都市祝祭としての山王祭につい

すく自粛や中止を余儀なくされる祝祭の部分について、実は現代においても地域社会にとっての役割を持てていないかと考える。祭りにおける祝祭の部分は、極論すれば、いたずらに多くの人が集まって馬鹿騒ぎをしているだけではないのである。

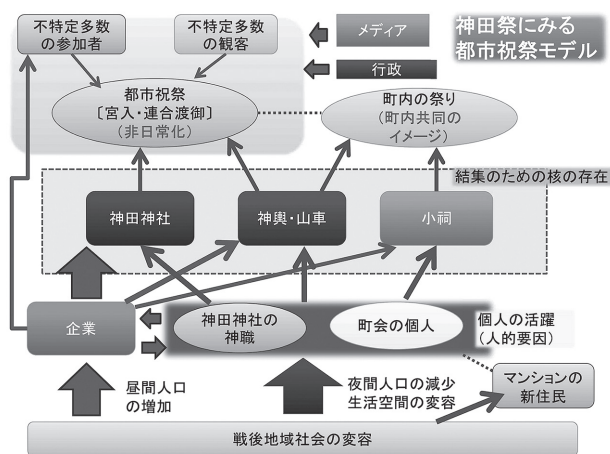


図1 神田祭モデル

て、平成三十年の山王祭の実態を踏まえ、日本橋・京橋・茅場町・八丁堀のエリアの連合である日枝神社下町連合（以下、「下町連合」）を中心に予備的に考察し、現代の「天下祭」に関する都市祝祭論へ向けた起点を提示したい。

なお、平成三十年の山王祭のあと、時代は平成から令和へと移り変わった。天皇の代替わりと同じ令和元年（二〇一九）五月一日に、神田神社宮司の大鳥居信史氏は名誉宮司となり、宮司には新たに清水祥彦氏が就任した。そして、令和元年五月の神田祭は、令和奉祝大祭として盛大に行なわれた。翌・令和二年は六月に山王祭が盛大に行なわれる予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、感染拡大防止の観点から、日枝神社での例祭は神職のみで厳粛に執行されたが、神幸祭、町会神輿や山車の巡幸は中止となった。

こうした経緯があるなかで、賑わいが構成され、密になりや

## 一、平成三十年の山王祭から見える特徴

明治維新百五十年を迎えた平成三十年（二〇一八）の山王祭は、六月七日（木）の氏子町会神輿の御魂入れ、六月八日（金）の神幸祭、夜の町内渡御・ビールパーティ、六月九日（土）の糀町惣町睦会（以下、「糀町惣町睦」）の日枝神社本社への連合宮入、連合渡御、町内渡御、六月十日（日）の下町連合渡御（撰社「日本橋」日枝神社・日本橋、氏子町会神輿の御魂返し（御魂抜き）、六月十五日（金）の例祭、の日程で祭礼行事が行なわれた。

ここでは、現代の山王祭から見える特徴について、現代の神田祭における五つの特徴と対比させながら整理していきたい。

### （一）都市祝祭と町内の祭りの複合構造

神田祭の一つ目の特徴として挙げたものであるが、山王祭においても同様の構造が指摘できる。

神田祭において都市祝祭は、神田神社への宮入や秋葉原中央通りの連合渡御（おまつり広場）のような多数の観客を見ることができ賑々しく行なわれる場である。一方、町内の祭りは、神輿や山車の町内渡御、各神酒所における神事を含めた行事など、ほとんど観客を見ることができないものの厳粛に行なわれる場である。つまり、「観客の見える祭り」である祝祭としての要素と、「観客の見えない祭り」である祭儀としての要素の複合構造で構成されている。

そして、複合構造になっているのは、祭りそのものの構造だけでなく、祭りの担い手の動員も複合構造になっているのである。

というのも、戦後地域社会の変容のなかで町内の居住人口が減少し、祭りの担い手は町内だけでは賄いきれず、町

内の神輿巡幸を維持するためには、町外から祭りの担い手を動員せざるを得なくなったからである。町会は地域祭礼の実施機関としての役割（役割動員）を果たしているものの、祭りの担い手（一般動員）は、神輿同好会、さまざまなネットワークを通じて参加する町内会員外の人たち、企業、女性を動員するように変化した。

そして、観客の多い神田神社への宮人や連合渡御の魅力が神輿の担ぎ手を維持・拡大し、町会の神輿巡幸を支えている。都市祝祭の要素を拡大しながら、町会を実施機関とする町内の祭りを支えている構造が見て取れるのである。<sup>(1)</sup>

一方、山王祭においても同様の構造が見られる。山王祭の下町連合渡御では、日本橋におけるクライマックスに多くの観客が訪れる。日本橋の中ほど（神田神社と日枝神社の氏子区域の境）に神田神社側の日本橋（室町一丁目会・本町一丁目町会）の人たちが高張提灯を掲げ、神輿の行く手を遮るパフォーマンスがなされるなか、日枝神社側の下町連合の担ぎ手たちは、神輿を高く上げる「サシ」をして盛り上がりを見せる。都市祝祭の一コマを見ることができるのである。

一時期、山王祭においても、戦後地域社会の変容のなかで町内の居住人口が減り、祭りの担い手の確保に苦しみ、祭りの担い手を町外から動員するようになった。そして、下町連合という横のつながりを作り、下町連合渡御という観客の集まる都市祝祭の場を創出した。その結果、「日本橋」という知名度とロケーションも影響して、神輿の担ぎ手は町外からも自然に集まるようになったという。

そして、町々の横のつながりが、都市祝祭と町の祭りをつなぎ、祭りの魅力を高めるとともに、神輿の担ぎ手を維持し、町内の祭りとしての意味



写真 1

下町連合渡御の様子（平成30年、筆者撮影）

を保っている<sup>(5)</sup>。

ただし、差異も見られる。神田祭は、外神田連合の十二睦や中神田十三ヶ町連合、錦連合や小川町連合など、連合町会や複数の町会の連合を単位としたまとまりもあるものの、どちらかといえば、個別町会ごとの町内の祭りとしての要素が強いことが窺える。

山王祭では、個別町会ごとの町内の祭りとしての要素もあるものの、どちらかといえば、下町連合や糺町惣睦、日本橋（日本橋六之部連合町会）、茅場町（日本橋七之部連合町会）、京橋（京橋一之部連合町会）、八丁堀（京橋七之部連合町会）など、連合町会を媒介とした「連合町内の祭り」としての要素が強いことを窺える。つまり、連合町内の祭りを介して個別町内の祭りを維持していると考えられる。神田祭の錦連合や小川町連合、あるいは外神田連合の十二睦に近い構造を持っていると解される。

## （二）結集のための核の存在

都市祝祭と町内の祭りの複合構造を形成するには、両者をつなぐものが必要である。それは、結集のための核の存在である。神田祭の二つ目の特徴として挙げたものであるが、山王祭にも共通して見られる。

神田祭では、神輿や山車などの祭礼の象徴、神田神社、町会や地区連合で祀る小祠などが結集のための核として挙げられる。

### 祭礼の象徴

神輿や山車などの祭礼の象徴を持つがゆえに、神田祭への参加を続け、町内渡御や連合渡御、神田神社への宮入を

続ける町会が数多く存在する。神輿や山車の巡幸を維持するためには、多数の担ぎ手を動員する必要がある。

そのためには、担ぎ手が満足するような観客が多数訪れる賑わいや見せ場の存在が不可欠である。そこで、祭礼の象徴を媒介とした連合渡御や宮入を開始する。その結果、町会の神田祭を賑やかなものにするとともに、町内共同のイメージを確認する機会となる。

だからこそ、町内共同の危機においては、祭礼の象徴が新たに誕生したり、復活したりする。須田町中部町会の「元祖女みこし」の誕生、紺屋町南町会のダンボール神輿の誕生と宮入の開始、神臺會の神輿修復と宮入の復活を経て秋葉原中央通りの「おまつり広場」の開始、岩本町二丁目岩井会の「桃太郎」山車の神田神社への展示と町内の祭礼行事の復活などが挙げられる。

そして、祭礼の象徴を媒介にその巡幸を担うさまざまな人的なネットワークを動員することによって、新たな人的なつながりが形成される<sup>(6)</sup>。つまり、祭礼の象徴の存在によって、不特定多数の個人が祭りに参加する契機が生まれるのである。

山王祭においても、祭礼の象徴を媒介とした同様の構造が見て取れる。以下に、山王祭における町会の主な祭礼の象徴を挙げておきたい。

下町連合では、現時点で把握した限りであるが、日本橋一丁目町会（大神輿一「昭和五十九年（一九八四）制作、以下、「制作」略）、日本橋二丁目通町会（大神輿一「昭和三十三年」、日本橋三丁目西町会（大神輿一「昭和三十四年」、小神輿二）、江戸橋連合（大神輿一「昭和三十三年」、八重洲一丁目東町会「檜物町」（大神輿一「明治四十三年」、京橋一丁目「京橋一丁目東町会と西町会」（大神輿一「昭和二十六年」、京橋二丁目東町会（大神輿一「昭和二十八年」、京橋二丁目西町会（大神輿一「昭和二十九年」、京橋三丁目町会（大神輿一「昭和十二年頃」、京橋

宝町会（大神輿一「昭和二十七年」、茅場町一丁目町会（大神輿一「昭和十五年」、小神輿一、太鼓山車二）、茅場町二・三丁目町会（大神輿一「昭和十一年」、小神輿一、太鼓山車二）、兜町町会（神輿一「不明」、太鼓山車二）、八丁堀一丁目町会（大神輿一「昭和二十七年」、小神輿二）、八丁堀二丁目西町会（大神輿一「昭和二十九年」、小神輿一、太鼓山車一「昭和三十四年」、八丁堀二丁目東町会（大神輿一「昭和二十九年」、八丁堀三丁目西町会（大神輿一「昭和三十一年」、小神輿一、太鼓山車二）、八丁堀三丁目東町会（大神輿一「昭和三十一年」、小神輿二）、などの祭礼の象徴を持つ。このうち、平成二十四年（二〇一二）の山王祭では、京橋宝町会が二十二年ぶりに神輿渡御を復活し、平成二十八年には、京橋二丁目西町会が三十年ぶりに神輿渡御を行なった。<sup>77</sup>

梶町惣町睦（上町）では、現時点で把握した限りであるが、永田町町会（大神輿一「昭和六十三年」、平河町一丁目町会（大神輿一「昭和三十四年」、小神輿一、太鼓山車一「昭和二十七年」、山車人形・神猿像）、平河町二丁目町会（大神輿一「昭和二十六年」、小神輿一、太鼓山車）、麴町一丁目町会（神輿一、太鼓山車二）、麴町二丁目町会（神輿一「昭和二十七年」、太鼓山車一「昭和二十七年」、麴町三丁目町会（小神輿一、太鼓山車一「山車人形・神猿像」、麴町四丁目町会（大神輿一「平成二十二年」、小神輿二）、麴町六丁目町会（小神輿一、太鼓山車一「昭和二十七年」、一番町町会（小神輿一、太鼓山車一「昭和二十六年」、二番町町会（大神輿一、太鼓山車二）、三番町町会（大神輿一、小神輿二、山車一「山車人形「東郷平八郎元帥」、昭和二十七年」、四番町町会（小神輿一「昭和三十四年」、太鼓山車一「昭和三十四年、山車人形「乙姫」、五番町町会（小神輿二）、六番町町会（神輿一「昭和二十九年」、太鼓山車一「昭和二十九年、山車人形・神猿像」、九段三丁目町会（小神輿一「大正期」、山車一「山車人形「牛若丸」・大正期」、九段四丁目町会（大「昭和二十二年」・中・小神輿各一、山車一「昭和二十七年、山車人形「牛

若丸・弁慶」…昭和三十二年」、獅子頭一対)、などの祭礼の象徴を持つ<sup>(8)</sup>。

下町連合では、どちらかといえば、神輿が多く見られ、山車が少ないといえる。一方、糺町惣睦では、神輿とともに、太鼓山車を含めた山車が複数見られ、山車人形を載せたものが多いという特徴が見られる。

こうした祭礼の象徴を媒介として、山王祭においても新たな人的なネットワークが形成され、不特定多数の個人が参加する契機が生まれている。神輿同好会、さまざまなネットワークを通じて参加する町内会員外の人たち、企業、女性などの参加が行なわれている。他町会、大学関係の参加者も見られる。

企業の具体的な事例については後述するが、他町会の事例としては、町会同士のネットワークを通じて、神田祭と山王祭の相互交流も見られる。

山王祭が蔭祭のときに、日枝神社の氏子である日本橋二丁目通町会の日本橋貳通睦が神田須田町二丁目町会の神田祭に参加し、神田祭が蔭祭のときに、神田神社の氏子である神田須田町二丁目町会が日本橋二丁目通町会の山王祭に参加している。神田祭が蔭祭のときに、神田神社の氏子である室町一丁目会と本町一丁目町会の青年部が日本橋三丁目西町会などの山王祭に参加し、山王祭が蔭祭のときに、日枝神社の氏子である日本橋(日本橋六之部連合町会)の町会が室町一丁目会の神田祭に参加している。

このほか、神田祭が蔭祭のときに浜町三丁目西部町会が茅場町一丁目町会の山王祭(金曜日の夜宮)に参加し、神田和泉町町会のお囃子の会



写真2

下町連合渡御・日本橋のクライマックス  
(平成30年、筆者撮影)

「泉笑会」の囃子屋台が日本橋三丁目西町会などの山王祭に参加している。

大学関係では、糀町惣町睦において、九段四丁目町会の神輿に、地元の日本大学の教職員が参加している。また、法政大学女子ラクロス部のメンバーが「惣町」の駒札を付けた神輿を女神輿として担いで日枝神社へ宮入する<sup>⑨</sup>。

### 神社（本社）

祭礼の象徴とともに神社（本社）の存在も重要である。神田祭では、神田神社の存在は、結集のための核として大きな存在感を示すが、山王祭においても、日枝神社（本社）および撰社（日本橋）日枝神社の存在も同様に大きな存在感を示している。

糀町惣町睦の日枝神社への連合宮入や茅場町二・三丁目町会の日枝神社への宮入、下町連合渡御の撰社日枝神社からの宮出し、八丁堀や茅場町二・三丁目町会の撰社日枝神社への宮入は山王祭において重視されている。

山王祭下町連合においては、日本橋も結集のための核として重要な位置を占める。日本橋の存在が下町連合渡御を盛り上げ、担ぎ手を集める魅力の一つとなっている。

また、九段三丁目町会では、地元の靖國神社へ宮入を行なっている。六月九日（土）の町内渡御の途中、「牛若丸」の山車と神輿が靖國神社に宮入してお祓いを受けた。

### 小祠

町会や連合町会で祀る小祠の存在も町内共同を考えるうえで結集のための核として一定の存在感を持っている。稲荷神社が多く見られるが、それぞれの小祠においては、例祭日や初午、新年や節分などに町会や地区連合で祭祀を行

なっている。町会や地区連合の人たちが集い、共同を確認する祭儀の場になっているといえる。

神田祭では、町内で祀る小祠に神酒所が作られ、小祠を起点に神輿や山車の巡幸が行なわれている事例も見られる。幸徳稲荷神社（小川町連合）、佐竹稲荷神社（内神田旭町町会）、金山神社（神田東紺町会）、柳森神社（神田須田町二丁目町会）、久松稲荷大明神（久松町町会）、濱町神社（浜町三丁目西部町会）、金比羅神社（中洲町会）などが挙げられる<sup>10)</sup>。

同様に、山王祭でも町内で祀る小祠に神酒所が作られ、小祠を起点に神輿や山車の巡幸が行なわれている事例も見られる。麴町一丁目町会（太田姫稲荷神社）、八丁堀二丁目東町会・八丁堀三丁目東町会（日比谷稲荷神社）、八丁堀三丁目西町会（天祖神社）などが挙げられる。麴町一丁目町会を中心に組織された麴町太田姫稲荷神社保存会が祀る太田姫稲荷神社では、五月の午の日に祭りを実施して同町会の関係者などが集う<sup>11)</sup>。八丁堀三丁目西町会で祀る天祖神社では、元旦祭や節分祭、例祭（日枝神社の例祭に併せて実施）を行ない、同町会の関係者が参列している<sup>12)</sup>。

以上のように、山王祭においても神田祭と同様に、祭礼の象徴、神社、小祠といった結集のための核の存在が見られる。

### （三）個人の活躍（人的要因）

都市祝祭と町内の祭りをつなぐ結集のための核は、個人の活躍、すなわち人的要因によって誕生・復活したり、強化されたりしている。神田祭の三つ目の特徴にあたるが、これも山王祭においても共通して見られる。

神田祭において、まず指摘できる人的要因は、神田神社の神職の活躍である。都市祝祭と町内の祭りをつなぎ、祭礼の象徴の誕生や復活、連合渡御や宮入の開始などを積極的に受け入れてきた神田神社の神職の力は無視できない。

がある。特に、神田神社宮司（現・名誉宮司）・大島居信史氏の神田祭を盛り上げようとする強い意志が、都市祝祭の形成に大きく影響していることが窺われる。神田神社宮司の意志は、神田神社の各神職にも受け継がれ、文化資源学会と協働で行なう附祭の復興、神田祭と「ラブライブ!」のコラボレーションなど、新たな賑わいの形成につながっている。

また、町会の担当神職と町会の特定の個人の関わりが、室町一丁目町会のように神田神社の神輿宮入の拡大につながっている。岩本町二丁目岩井会においては、平成二十五年（二〇一三）の「桃太郎」山車の神田神社への展示を契機に、二十年振りの神酒所の設置と、平成二十七年の町会神輿の町内渡御の復活がなされた。この「桃太郎」山車の神田神社への展示においても、神田神社宮司や担当神職が積極的に関わり、「桃太郎」山車は最終的に神田明神資料館へ寄贈された。

次に、指摘できるのは、町会の個人の活躍である。祭礼の象徴の復活や誕生に大きな影響を与えたのは、町会の特定の個人だからである。須田町中部町会の「元祖女みこし」の誕生（当時の町会長のG・Y氏や婦人部長のK・O氏など）、紺屋町南町会のダンボール製神輿の誕生（当時の町会役員のS・I氏）、神臺會の神輿の復活（町会長のT・N氏）と秋葉原中央通りの連合渡御「おまつり広場」の形成など、多彩で個性的な個人の活躍が浮き彫りとなった。そして、神田神社の神職と個人の活躍によって、神田祭には不特定多数の個人が観客や参加者として訪れるようになったのである。<sup>13</sup>

以上のように、神田祭では、神田神社の神職、町会の特定の個人が挙げられ、両者の活躍によって、不特定多数の個人が観客や神輿の担ぎ手として参加する都市祝祭の場が生まれた。そして、神田神社の神職と町会の個人が祭りを通じて神社と町会をつないでいる。

神田神社の神職は、神幸祭や御魂入れといった祭儀を厳肅に執行するのみならず、神田神社への宮入や、秋葉原中央通りの「おまつり広場」といった連合渡御、附祭など、都市祝祭の場の形成にも力点を置いている。神田祭では、神田神社が『神田祭公式ガイドブック』<sup>14</sup>を毎回製作している。また、神田神社への宮入の指揮も神田神社大鳥居横に櫓を設けて神田神社の神職が行ない、秋葉原中央通りの「おまつり広場」の式典にも神田神社宮司が参加している。ただし、御魂抜き（返し）については実施率が少ない現状がある。

一方、山王祭においても個人の活躍が見られる。日枝神社の神職、町会や連合町会の個人の活躍によって不特定多数の個人が観客や神輿の担ぎ手として参加する都市祝祭の場の形成につながっていると考えられる。

特に、都市祝祭の場の形成には、下町連合や糀町惣町睦のメンバーの活躍が窺われる。下町連合では、八重洲一丁目中町会会長のT・F氏（昭和十二年生）、日本橋七之部連合町会（茅場町）会長のT・A氏（昭和十二年生）、日本橋六之部連合町会会長のS・S氏（昭和十四年生）、京橋一丁目東町会のM・T氏（昭和二十二年生）、八丁堀三丁目西町会会長のM・D氏（昭和二十二年生）、八丁堀四丁目東町会会長のK・M氏（昭和二十二年生）、下町連合代表のA・T氏（昭和三十六年生）、京橋はじめ会のN・S氏（昭和三十七年生）、日八会のM・Y氏（昭和四十二年生）、茅場町のK・N氏（昭和四十一年生）らが活躍し、青年部の横のつながりを作るとともに、長老世代を説得して新たな都市祝祭の場を形成した。<sup>15</sup>こうした下町連合、あるいは糀町惣町睦のメンバーが各連合町会を構成する町会をつないでいると見られる。

そして、下町連合や糀町惣町睦のメンバーでもある御防講の講員（たとえば、下町連合代表のA・T氏、八丁堀のM・D氏やK・M氏、糀町惣町睦のH・S氏など）が下町連合と糀町惣町睦をつないでいる。言い換えれば、平成二十二年（二〇一〇）に再興された御防講の講員を媒介に、下町連合と糀町惣町睦が祭りを通じて神社と町会をつな

ぐ。

日枝神社の神職は、どちらかといえば、神幸祭や御魂入れ・御魂抜き（返し）の執行など、祭儀に力点を置いていることが窺われる。特に、御魂入れのみならず、御魂抜きも祭員二名で厳粛に執行し、高い実施率を保っている。

日枝神社宮司の宮西修治氏が著した『現代祝詞例文撰集』<sup>16</sup>には、山王祭における「御魂入」と「御魂抜」の祝詞例文が収められていることから、特に神事の執行を重視する姿勢が窺われる。

山王祭では、下町連合と糺町惣睦睦においてそれぞれ、山王祭のガイドブックを製作している<sup>17</sup>。また、平成三十年の山王祭では、糺町惣睦睦の連合宮入においては御防講の講員が、下町連合渡御においては下町連合のメンバーが中心となって神輿の巡幸を指揮している様子が見られた。一方で、日枝神社の神職も連合宮入や下町連合渡御の先頭においてお祓いしながら進むなど、神事の執行を中心に関わっている様子が確認された。

以上のように、神田祭では神田神社の神職と町会の個人の活躍がともに祭儀や都市祝祭の維持・拡大に影響を与えているといえる。一方、山王祭では日枝神社の神職は神幸祭などの祭儀を中心に活躍し、下町連合や糺町惣睦睦のメンバーの活躍が連合町会と個別町会をつなぎ、都市祝祭の維持・拡大に大きな役割を果たし、下町連合や糺町惣睦睦のメンバーでもある御防講の講員を媒介に祭儀と都市祝祭をつないでいる。つまり、神田祭と山王祭では個人の活躍（人的要因）の構成要素に違いがあるといえる。

#### （四）企業の参加

神田祭の四つ目の特徴として挙げた「企業の参加」について、山王祭においても共通して見られる。具体的な共通点として、神田祭、山王祭ともに金曜日の夜の祭りを実施し、そこに企業の参加が確認できることである。

神田祭では、鍛冶町一丁目町会、鍛冶町二丁目町会、神田須田町二丁目町会、紺屋町南町会、外神田三丁目金澤町会などで金曜日の神輿巡幸を行なっている。また、栄町会では、金曜日の夜に「ふれあい広場」という地元企業との懇親の場を設けている<sup>(18)</sup>。

山王祭の下町連合では、京橋一之部連合町会、日本橋三丁目西町会、江戸橋連合（日本橋一丁目東町会・日本橋二丁目町会・日本橋三丁目東町会）、茅場町一丁目町会、茅場町二・三丁目町会、兜町町会などで、金曜日の夜の神輿巡幸を実施している。八丁堀一丁目町会、八丁堀三丁目西町会、八丁堀四丁目東町会などでは、金曜日の夜にビールパーティーという懇親の場を設けている<sup>(19)</sup>。柊町惣町睦では、九段四丁目町会が金曜日の十八時から町内渡御を実施している。

また、日曜日に実施された連合渡御にも多くの企業が参加する点でも共通している。神田祭では、岩本町三丁目町会の神輿に山崎製パン、本間組、田島ルーフィング、貝印、神田和泉町町の神輿にYKK、凸版印刷、須田町北部町会の神輿にりそな銀行、新日鉄興和不動産、JR東日本ビルディング、JRステーションリレーリング、みずほ銀行、史蹟将門塚保存会（大手・丸の内町会）の大神輿に三菱地所、三井物産、三井生命保険、物産不動産、三菱UFJ銀行、竹中工務店、プロミス、丸紅、パレスホテル、三菱不動産などの企業が参加した<sup>(20)</sup>。

山王祭では、六月十日（日）の下町連合渡御には、京橋宝町会の神輿に清水建設、日本橋一丁目町会の神輿に野村證券、野村不動産、三井不動産、国分、みずほ銀行、日本橋通二丁目町会に水戸証券、日本橋高島屋、丸善、三井不動産、住友不動産、八重洲一丁目中町会（檜物町）の神輿に東京建物などの企業が参加した<sup>(21)</sup>。

一方、企業の参加において、神田祭と山王祭には差異も見られる。神田祭の神幸祭は土曜日に実施されるため、渡御ルートにおいて会社員の出迎えの光景はほとんど見ることができないが、山王祭の神幸祭は金曜日に実施されるた

め、渡御ルートにおいて、午前中の麴町エリアでは会社員による出迎えの光景を複数見ることができた。

### (五) 非日常化するイベント

神田祭の五つ目の特徴も山王祭において見ることができる。

「祭りの日常化」(「脱日常化しにくい祭り」<sup>22)</sup>が指摘される今日、神田祭では、観客が多数を占める連合渡御や神田神社への宮入において、非日常化すると考えられる。特に、神田神社への宮入では、神社境内の神輿とその参加者、観客、参拝者などでごった返しカオス化し、否応なく祭りが非日常化する。そこには、お囃子の音、神輿の掛け声、屋台(出店)など、五感に働きかける要素も揃っている。つまり、神田神社の聖性によって、境内の賑わいが作られ、宮入では非日常性を帯びると考えられる。この神社の聖性は、日々の神職による祭祀や活動、あるいは氏子町会の特定の個人や崇敬者によって強化されている。この神輿宮入の場面において、神輿を担ぐ参加者や祭りを見る観客にとっては、少なくとも「非日常化するイベント」になっているといえる。そこに都市祝祭としての神田祭の賑わいがある。<sup>(23)</sup>

また、多数の神輿が集まる「おまつり広場」(秋葉原中央通りの連合渡御)なども、少なくとも「非日常化するイベント」になっていると考えられる。

山王祭においても、京橋から日本橋に至る中央通りの下町連合渡御、特にクライマックスの日本橋での連合渡御の場面は、日本橋のロケーション、多数の観客の存在、高張提灯を持って行く手を遮る室町一丁目会と本町一丁目会のパフォーマンズから、神輿の担ぎ手も大きな盛り上がりを見せる。ここでも、少なくとも「非日常化するイベント」になっているといえる。

また、糺町惣睦の日枝神社への連合宮入もそうした性格を持つと考えられる。

以上のように、山王祭においても、神田祭と同様に、五つの特徴（要素）が見られ、この五つの特徴をもとに都市祝祭としての山王祭が拡大してきたことが窺える。

## 二、戦後の山王祭下町連合の行事変化

次に、近年の山王祭下町連合の興隆から、どのように都市祝祭の場が形成されてきたのかを概観しておきたい。

神田祭では、平成二十五年（二〇一三）の神田祭調査から、ここ十年以内に神田神社への神輿宮入を開始した町会が複数存在し、秋葉原中央通りで連合渡御を行なう「おまつり広場」は平成六年に開始された。また、縮小していた町会の神田祭が祭礼の象徴の誕生や復活によって、祭りが盛んになり、地域社会が再活性化する事例が見られた。

つまり、地域社会の変容という社会変動に対して祭りが衰退していくのではなく、社会変動に対して祭りを盛んにして対応していることが、神田祭のおおよそ五十年の盛衰から浮き彫りになってきた。<sup>24)</sup>

それでは、山王祭下町連合においてはどのようなふうであったのだろうか。まずは、連合町会ごとにインタビューから明らかにした事実を整理しておきたい。<sup>25)</sup>



写真3  
糺町惣睦の日枝神社への連合宮入  
(平成30年、筆者撮影)

### (一) 日本橋（日本橋六之部連合町会）

かつては商店が広がり、住み込みの従業員もいたが、戦後、住民が減り、一時期、神輿渡御が途絶えた。昭和三十年代に日本橋一丁目町会や日本橋二丁目町会などで神輿を新調した。平成元年（一九八九）には、日本橋の青年部の横のつながりを作るべく「日八会」を結成した。同じ頃（今から約三十年前）、山王祭において中央通りの連合渡御を開始した。

### (二) 茅場町（日本橋七之部町会）

かつては職人の町であったが、住民が減り、子供も減少した。戦前から「睦会」という祭りのための組織があったが、戦後、青年部が縮小するなかで、今から約四十五年前に「歩会」という町の行事を手伝う組織を結成した。その後、歩会自体も、高齢化するなかで、下町連合へ参加し、横のつながりが生まれた。

山王祭では、土曜日（神幸祭の翌日）に、阪本小学校の学校公開と一緒に子供神輿と山車の渡御を実施している。山王祭以外に、餅つきや納涼祭、スイカ割り、手持ち花火大会といった行事を開催している。

### (三) 京橋（京橋一之部連合町会）

町はバブル期に一気に変貌し、住民はわずかになった。連合町会長で八重洲二丁目北町会長のN・F氏（昭和四年「一九二九」生）は、「うちの町会は、わずかな町の人と二十六社ほどの会社で成り立っています」という。

今から二十年前頃、京橋の青年部で横のつながりを作るべく「京橋はじめ会」を結成した。

平成十二年（二〇〇〇）頃、宵宮に京橋と日本橋の神輿乗り入れを実施し、それが下町連合の結成につながった。

現在、金曜日（神幸祭）の夜には地域の会社員限定で宵宮を、土曜日の夜には京橋連合の神輿渡御を実施している。

#### （四）八丁堀（京橋七之部連合町会）

かつて印刷・製本関係、鉄鋼問屋といった職人の町であった。すずらん通りには、生活必需品や小売の商店が並び、賑わいがあった。戦後、町は変貌し住民は減ったが、マンションが建ち、平成六年（一九九四）頃から人口は増加に転じた。

茅場町にある摂社（日本橋）日枝神社への宮入は古くから行なっていたが、戦後一時途絶えた。昭和四十一年（一九六六）頃、「八丁堀祭盛会」という同好会が結成された。

今から二十六年前に土曜日（神幸祭翌日）の朝、摂社へ代表（連合町会会長の町会）の神輿一基の宮入を復活させ、八丁堀連合渡御も行なうようになった。

平成十二年には日枝神社本社への宮入を実施した。また、下町連合へ参加し、平成二十四年から摂社日枝神社から日本橋への連合渡御を開始した。

現在、金曜日の夜には、企業向けのビールパーティーや町内渡御を実施している。

#### （五）下町連合の行事変化<sup>26)</sup>

以上の連合町会ごとの変化を踏まえたうえで、次に下町連合全体の行事変化について年代順にまとめておきたい。昭和四十年（一九六五）頃 京橋七之部連合町会として八丁堀エリアの連合渡御を開始した。その後、一時中断さ

れた。

平成元年（一九八九）、日本橋六之部連合町会の青年部で横のつながりを作るべく「日八会」を結成した。同年、「日本橋六之部オートナムまつり」として西河岸地蔵寺の縁日を復活した。縁日の復活には、八重洲一丁目中町会会長のT・F氏（昭和十二年生）の活躍があった。<sup>(27)</sup>

同じ頃、日本橋で中央通りの連合渡御を開始した。

平成五年、皇太子殿下（今上天皇陛下）の御成婚を奉祝して、日枝神社の氏子地域の代表が集まり、中央通りを新橋から日本橋まで神輿で凱旋する。これを契機に、H・S氏によれば、同じ氏子でも全く接点がなかったが、「奉祝を機にきずなが生まれ、オール山王」で氏神様にご奉仕したい。神田明神にもあるのだから、日枝神社にも御防講を復興させたいという機運が高まった<sup>(28)</sup>という。

平成六年、京橋七之部連合町会青年部による「山王会」が八丁堀の連合渡御を復活した。

平成十年頃 京橋一之部連合町会の青年部で「京橋はじめ会」を結成した。

平成十二年、宵宮に京橋と日本橋の神輿乗り入れを実施した。平成十二年頃、日八会（日本橋六之部連合青年部）から京橋に「会合に参加しませんか」という打診があり、京橋一丁目東町会のM・T氏（昭和二十二年生）と京橋二丁目西町会のT氏が参加した。そこで、「宵宮をやっているの、日本橋と京橋と、一緒にやりませんか」という話が出て、「やりましょう」という話になった。それを契機に、当時の江戸消防記念会会長で日本橋「ろ組」の蔦頭Y・K氏（昭和八年生）などの理解と仲介を得て、京橋の他町会を説得して、平成十二年に宵宮の乗り入れを実現したという。この平成十二年の宵宮では、日本橋三丁目の神輿が京橋へ迎えに行き、京橋三丁目の神輿と一緒に日本橋まで戻って、宵宮を実施した。<sup>(29)</sup> この宵宮の京橋と日本橋の神輿乗り入れが、先述したように、下町連合の結成につながっ

た。

同年、八丁堀が日枝神社本社への宮入を実施した。

平成十四年、二回目の宵宮の京橋と日本橋の神輿乗り入れを実施した。このとき、京橋一丁目と京橋二丁目の神輿も参加するようになり、中央通りと八重洲通りの交差点に日本橋と京橋の神輿五基が集合した。<sup>(20)</sup>

平成十五年三月に「日本橋創架四百年祭」が実施され、同年十一月には江戸開府四百年「江戸天下祭」を開催した。

平成十六年、三回目の宵宮の京橋と日本橋の神輿乗り入れを実施し、京橋の神輿が全基参加するようになった。<sup>(31)</sup>

同じ頃（平成二十六年の十年前）、山王祭において、神田神社の氏子である室町一丁目会と本町一丁目町会による日本橋での出迎えが開始された。<sup>(32)</sup>

平成十八年、下町連合渡御が開始された。このときは、日本橋・京橋・茅場町によるものであった。下町連合を結成した背景には、「祭りの魅力を高めて、担ぎ手を増やす」という目的があった。<sup>(33)</sup>

平成二十年、八丁堀（京橋七之部連合町会）が下町連合渡御に参加した。同年の山王祭は、天皇陛下御在位二十年奉祝大祭として実施された。この年の神幸祭から中央通りを渡御できるようになる。また、天皇陛下御在位二十年奉祝行事の直会の席上、江戸消防記念会会長（当時）のY・K氏から日枝神社宮司（当時）の宮西惟道氏に日枝御防講の再興を進言され、平成二十二年に再興が叶うことになった。<sup>(34)</sup>

下町連合の結成により、日本橋・京橋・茅場町・八丁堀の交流は増えて「地元」が広がり、他の町会の組織や仕来りに触れる機会ができた自分たちの町会を見直す良い刺激になったという。<sup>(35)</sup>

ただし、下町連合の結成には、各町会の青年部同志ではすんなり話が進んだが、「何より大変だったのが親父たち

の世代を説得すること」であったという。「連合の前に、町内のことをちゃんとやらなきゃだめだ」、「なんで他の地区に出て行かなきゃならないんだ」、「お前たちにはまだ早い」といった批判に対し、粘り強く対話を重ね、一步一步前進する形で下町連合を広げてきたという。<sup>(36)</sup>つまり、下町連合に参加する町会青年部の個人の活躍も大きいといえる。

平成二十二年、日枝御防講が八十年振りに再興された。<sup>(37)</sup>

平成二十四年、下町連合渡御において摂社（日本橋）日枝神社からの宮出しが開始された。

平成二十六年、茅場町一丁目町会の神輿が六月十三日（金）の宵宮において約十六年振りに町内巡幸を実施した。この年の下町連合渡御から、中央通りを全面封鎖し渡御を行なった。

平成二十八年、佐倉から山車が里帰りして下町連合渡御に参加した。

以上のように、山王祭下町連合においても、ここ三十年で祭りが拡大し、都市祝祭の場が形成されたことがわかる。その背景には、下町連合のメンバーの活躍とともに、当時の江戸消防記念会会長・日本橋「ろ組」の鳶頭Y・K氏の活躍も大きいことがわかる。また、皇太子殿下（今上天皇陛下）の御成婚や江戸開府四百年・日本橋創架四百年祭、天皇陛下御在位二十年奉祝大祭など記念すべき年と都市祝祭の場の形成も関係することが窺える。

### 三、山王祭下町連合の「祭りの評価」

こうした都市祝祭としての要素が拡大する一方で、町内の祭りとしての役割も増している。

平成二十五年（二〇一三）の神田祭を対象とした調査から、神田神社へ宮入を実施した五十四町会（参考事例二町

会を含む」と二連合（錦連合と小川町連合）を対象に、町会にとって神田祭がどのような場になっているかを質問すると、類似例を含み「地域・町会（町会員）の結束や絆の確認、親睦や活性化の場」が三十三町会、「伝統・ブランド」が十二町会、「町内・町会で最大のイベント・行事」が十町会の順の回答となった。

神田祭では、「祭りをやるために町会がある」（神田和泉町町会）、「お祭りは町会の最後の拠り所」（岩本町一丁目町会）など、「地域」や「町内」を強調した評価が多く、伝統やブランド力を有し、町会のつながりを維持するための最大の行事として神田祭が位置付けられていることがわかる。<sup>(36)</sup>

では、山王祭は町会や連合町会にとってどのような場になっているのだろうか。下町連合の主だった人たちの「祭りの評価」に耳を傾けてみたい。

## （二）日本橋（日本橋六之部連合町会）

連合町会会長のS・S氏（昭和十四年「一九三九」生）は、「祭りは、つながりですね。祭りは、どこかの企業さんに頼むというわけにはいきません。町内のよく知っている人が仕切らないとやれません。それは大変なことです。地元にいる人たちのエネルギーがないと祭りはできないし、やっても面白くありません」という。

八重洲一丁目中町会会長のT・F氏（昭和十二年生）は、祭りを続けるのは、「伝統的なお祭りをなくしたくないという、ただ一心」で、祭りは商業イベントとは違い、長年培った伝統的な力で、地元住民と密着したものでないという。

## (二) 茅場町（日本橋七之部連合町会）

連合町会会長のT・A氏（昭和十二年「一九三七」生）は、「昔は町の祭りだったわけです。年寄りや壮年、青年、子供や赤ん坊もいて、それが一体となったのが祭りでした」と話す。だから、山王祭は町の根幹で、神輿も町内をくまなく巡り、町の楽しみの一つだったという。

連合町会青年部部長のK・N氏（昭和四十一年生）は、山王祭を大切にしながらも、地域の現状を冷静に見て「祭りは、初めての方や新しい住民の方にとって、敷居が高く、入りづらい面もあると思います。ですので、祭りに入っていただく前に、地域の他のイベントで関わりを持っていただくことも大事」という。

## (三) 京橋（京橋一之部連合町会）

連合町会青年部（京橋はじめ会）会長のN・S氏（昭和三十七年「一九六二」生）は、「再開発が進んで、町内のほとんどが企業になったときに、町の昔からの人も企業も唯一、つながれるのは祭りだと思います。祭りは神事です、最後は町のつながりです」という。

## (四) 八丁堀（京橋七之部連合町会）

八丁堀三丁目西町会会長のM・D氏（昭和二十二年「一九四七」生）は、「八丁堀は日枝神社の氏子であり、祭りを行なうことによって町内が一つにまとまります。祭りを通じた住民同士の関わりが、防災・防火を含め何かあったときに大変役に立ちます。今後の八丁堀の町全体を考えるうえで、祭りは最大の核になります」という。

八丁堀四丁目東町会会長のK・M氏（昭和二十二年生）は、町内にできた新しいマンションの住民の方にとって、

町会に入るのは敷居が高いと感じ、「祭りやイベントに参加してみても、町会がどんなことをやっているのかをだんだんと知るようになる」と、町会に入られる方が多くいます」という。

#### (五) 日枝神社下町連合

下町連合代表のA・T氏(昭和三十六年「一九六一」生)は、「この辺の人たちは都市化が進んでも、祭りを残そうという気持ちが強く、ただ残すのではなく、本当に残すための努力をするんです」と話す。それも天下祭の伝統を受け継ぐ神様のいる祭りだから、現代に続ける意義を強調する。

ただし、それは単に儀式はつたものではないという。戦後、町の住民は減少したが、町に通う昔からの住民が存在し、その人たちも一度町外へ出た経験から、外部に対して閉鎖的ではなく、柔軟で優しい。だから、さまざまなものを受け入れて手弁当で発信もしやすい。そうしたなかで、観客の少ない神輿の町内渡御だけでなく、観客が多くいる下町連合渡御が創出されていた。その結果、「日本橋」という知名度とロケーションも影響し、神輿の担ぎ手は町外から自然と集まるようになったという。

以上のように、下町連合の「祭りの評価」において、山王祭は伝統や神事としてのイメージを維持しながら、連合町会や町会にとっては「まとまり」や「つながり」を維持する場として位置付けられていることがわかる。それも、企業やマンシヨンの新住民とのつながりを模索する場となっていることが窺える。

## おわりに

このように、現代の神田祭と山王祭が盛んに行なわれているのは、個人の活躍（人的要因）によって、結集のための核の聖性が強化され、また企業との関係性も維持しながら、都市祝祭と町内の祭りをつなぎ、不特定多数の個人が祭りの担い手や観客として集う賑わいの場を生み、非日常化するという共通した構造を持っているからであることが窺われる。

特に、神田祭と山王祭では、個人の活躍（人的要因）によって結集のための核の聖性が強化されるか否かが、その祭りの盛衰を左右している点で共通している。つまり、人的要因と結集のための核の有無が祭りの再聖化と世俗化につながっていることが両者から共通して見えてくるのである。

ただし、神田祭と山王祭には、個人の活躍（人的要因）の内実に違いがある。神田祭では、神田神社の神職と町会の個人の活躍が神幸祭のみならず、附祭を含めた都市祝祭や町内の祭りの維持・拡大に果たす要素が強いが、山王祭では、どちらかといえば日枝神社の神職の活躍が神幸祭や御魂入れ・御魂返しに維持・拡大に、下町連合や糺町惣睦、御防講の個人の活躍が都市祝祭や町内の祭りの維持・拡大に果たす要素が強いという特徴が見られる。

言い換えれば、神田祭では、神田神社の神職と町会の個人がともに祭儀や都市祝祭の維持・拡大に影響を与え、神社と町会をつないでいるが、山王祭では、神幸祭などの祭儀においては日枝神社の神職と御防講の個人が、連合渡御や宮入といった都市祝祭においては下町連合や糺町惣睦、御防講の個人の活躍がその維持・拡大に影響を与え、神社と連合町会・町会をつなぐという棲み分けがある。そして、この祭儀と都市祝祭の棲み分けが、平成二十二年（二〇一〇）に再興された御防講の講員、あるいは鳶頭によって媒介され、つなげられていることが窺われる。

つまり、神田祭では神社と町会は直接的に結び付く要素が強いが、山王祭では下町連合や桃町惣町睦、御防講が媒介する形で神社と連合町会・町会が結び付く要素が強いと考えられる。このことは、神田祭は、どちらかといえば、個別町会ごとの町内の祭りとしての要素が強いが、山王祭は、連合町内の祭りを介して個別町内の祭りを維持している要素が強いという違いにも対応していると見られる。

こうした違いはあるものの、現代の神田祭と山王祭は、社会変動に対する危機意識が個人を突き動かし、個人の活躍が神社や日本橋、祭礼の象徴といった結集のための核の聖性を強化し、祭りの再活性化につながったと考えられる。そして、結集のための核の聖性が強化されるなかで、祭りが再活性化するのみならず、過去が再構成されて「意味付けられた過去」、すなわち、「伝統」<sup>(11)</sup>や「ブランドイメージ」<sup>(12)</sup>が形成されたと考えられる(図2参照)。

いわば、公共性と個人性のダイナミズムのなかで、神社や祭礼の象徴といった「結集のための核」を介して、祭祀・祭礼の復興や再活性化がなされることによって、過去や場が意味付けられ、再構成された「伝統」が更新されていくのではなからうか。

そして、都市祝祭の場を通じて、地域の祭りを維持し、コミュニティをたとえ一時的にはあったとしても再活性化する、いわばレジリエンス(復元力)<sup>(13)</sup>につながっていると考えられる。

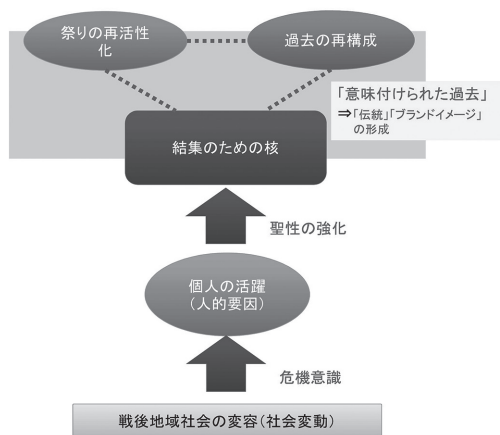


図2 神田祭と山王祭の共通モデル (予備的モデル)

そこに、「天下祭」としての歴史ある神田祭や山王祭の賑わいと興隆があると予備的な考察の段階では考えられる。今後更なる実態調査に基づく詳細な検証が必要である。

## 註

- (1) 蘭田稔「祭と都市社会——「天下祭」(神田祭・山王祭) 調査報告(二)——」『國學院大學日本文化研究所紀要』第二十三輯、國學院大學日本文化研究所、昭和四十四年。
- (2) 松平誠「都市祝祭伝統の持続と変容——神田祭による試論——」『応用社会学研究』第三十五号、立教大学社会学研究室、平成五年。
- (3) 秋野淳一「神田祭の都市祝祭論——戦後地域社会の変容と都市祭り——」岩田書院、平成三十年。
- (4) 前掲秋野「神田祭の都市祝祭論——戦後地域社会の変容と都市祭り——」五三六～五三八頁。
- (5) 秋野淳一「現代に生きる山王祭・下町連合の魅力——都市祝祭と町内の祭りの複合構造——」『平成三十年山王祭』日枝神社下町連合、平成三十年、六四～六五頁。
- (6) 前掲秋野「神田祭の都市祝祭論——戦後地域社会の変容と都市祭り——」五四四～五四五頁。
- (7) 都市出版株式会社月刊「東京人」編集室編『平成三十年山王祭』日枝神社下町連合、平成三十年、三八～三九頁。および、平成三十年の山王祭を対象とした筆者による観察調査。
- (8) 平成三十年の山王祭を対象とした筆者による観察調査。および、糀町惣町睦会『山王祭』発行委員会編『山王祭』糀町惣町睦会、平成三十年。
- (9) 前掲『山王祭』糀町惣町睦会、平成三十年。および、平成三十年の山王祭を対象とした筆者による観察調査。
- (10) 前掲秋野「神田祭の都市祝祭論——戦後地域社会の変容と都市祭り——」五四五～五四六頁。
- (11) 千代田区教育委員会・千代田区四番町歴史民俗資料館編『千代田区文化財調査報告書十七 千代田の稲荷——区内稲荷調査報告書——』千代田区教育委員会・千代田区四番町歴史民俗資料館、平成二十年、二四頁。
- (12) 八丁堀三丁目西町会創立50周年記念誌作成委員会編『中央区八丁堀三丁目西町会創立50周年記念誌 わが町のあゆみ』八丁堀三丁目西町会、平成十三年。

- (13) 前掲秋野『神田祭の都市祝祭論―戦後地域社会の変容と都市祭り―』五四九～五五二頁。
- (14) 平成二十九年は、『平成二十九年神田祭』神田神社、平成二十九年。
- (15) 筆者によるインタビュー調査。および空木哲生・作画「下町は今宵もノミユニケーション」『平成二十六年山王祭』日枝神社下町連合、平成二十六年、二一～二三頁、などによる。
- (16) 宮西修治『現代祝詞例文撰集』戎光祥出版、平成二十九年。
- (17) 平成三十年は、前掲『平成三十年山王祭』日枝神社下町連連合。および前掲『山王祭』糺町惣町睦会、平成三十年。
- (18) 前掲秋野『神田祭の都市祝祭論―戦後地域社会の変容と都市祭り―』一九八頁。
- (19) 秋野淳一「企業の参加と都市祭りに関する一考察―東京の神田祭・山王祭・渋谷の祭礼を中心に―」『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第十三号、國學院大學研究開発推進センター、平成三十一年。
- (20) 前掲秋野『神田祭の都市祝祭論―戦後地域社会の変容と都市祭り―』一九七～一九八頁、三二六頁。
- (21) 前掲秋野「企業の参加と都市祭りに関する一考察―東京の神田祭・山王祭・渋谷の祭礼を中心に―」。
- (22) 芦田徹郎『祭りと宗教の現代社会学』世界思想社、平成十三年。
- (23) 前掲秋野『神田祭の都市祝祭論―戦後地域社会の変容と都市祭り―』五六五～五六六頁。
- (24) 前掲秋野『神田祭の都市祝祭論―戦後地域社会の変容と都市祭り―』二〇七頁。
- (25) 前掲秋野「現代に生きる山王祭・下町連合の魅力―都市祝祭と町内の祭りの複合構造―」六四～六五頁。
- (26) 「山王祭・下町連合年表」都市出版株式会社月刊『東京人』編集室編『平成二十八年山王祭』日枝神社下町連合、平成二十八年、一三頁。および、筆者によるインタビュー調査。それ以外の出典については、都度、脚注を付けている。
- (27) 『東京人』通卷三七三三三(二〇一六年七月増刊号)、都市出版、平成二十八年、一〇〇頁。
- (28) 『東京人』通卷三二〇号(二〇一二年六月号)、都市出版、平成二十四年、三六頁。
- (29) 前掲『東京人』通卷三七三三三、六五頁。
- (30) 前掲『東京人』通卷三七三三三、六五頁。
- (31) 前掲『東京人』通卷三七三三三、六五頁。
- (32) 都市出版株式会社月刊『東京人』編集室編『平成二十六年山王祭』日枝神社下町連合、平成二十六年、三三頁。

- (33) 前掲『東京人』通卷三七三三、六六頁。
- (34) 前掲『山王祭』杵町惣町睦会、平成三十年、六五頁。
- (35) 前掲『東京人』通卷三七三三、六六頁。
- (36) 『東京人』通卷三二〇号、四一頁。
- (37) 「日枝御防講再興趣意」には、「一火災等神社危急の際には伝統ある江戸町火消と連携して率先駆付け御社頭の奉護に当たる 二諸祭典神事において主として警護を奉仕する 三御社頭の尊厳の護持と鎮守の杜の美化 四神社の諸事業に協力して御社頭の興隆と御神徳の発揚に努める 五講員相互の親睦と興隆を図る」とある（前掲『山王祭』杵町惣町睦会、平成三十年、六五頁）。
- (38) 前掲秋野『神田祭の都市祝祭論―戦後地域社会の変容と都市祭り―』五四二～五四三頁。
- (39) 前掲秋野『現代に生きる山王祭・下町連合の魅力―都市祝祭と町内の祭りの複合構造―』六四～六五頁。
- (40) エリック・ボブズボウム、テレンス・レンジャー編、前川啓治・梶原景昭他訳『創られた伝統（紀伊國屋書店、平成四年）の「伝統の創造」や、今泉宜子『明治神宮―「伝統」を創った大プロジェクト―』（新潮選書、新潮社、平成二十五年）の「創る伝統」の議論につながると考えられる。また、神田神社権禰宜の岸川雅範は、神田祭の歴史的考察、特に大正時代の町神輿の誕生から、「伝統は創造されるもの」ということに気が付いたとしている（岸川雅範『江戸天下祭の研究―近世近代における神田祭の持続と変容―』岩田書院、平成二十九年、四一六頁）。
- (41) 比較宗教学者の平井直房は神道が歴史的に持つ特徴として、公共性と個人性を挙げている（平井直房『日本人の宗教―岸本英夫編『世界の宗教』原書房、平成十六年。平井直房『小規模神社の教化活動―神道と神道教化―』神社新報社、平成五年）。
- (42) 祭りが持つダイナミズムに着目した先駆的な研究として、柳川啓一の「親和と対抗の祭―秩父神社夜祭―」（『祭と儀礼の宗教学』筑摩書房、昭和六十二年、所収）がある。近年では、祭礼をめぐる町内のコンフリクトとそれを通じた町内内部のダイナミズムについて論じた、武田俊輔『コモنزとしての都市祭礼―長浜曳山祭の都市社会学―』（新曜社、平成三十一年）がある。しかしながら、結局のところ、祭りが持つダイナミズムを浮き彫りにした段階にとどまっている。そうした意味では、柳川の「親和と対抗の祭」の域を出ていない。
- (43) 祭礼を介した村落のレジリエンスに注目した研究として、滝沢克彦『祭礼の持続と村落のレジリエンス―東日本大震災をめぐる宗教社会学的試論―』（『宗教と社会』第十九号、「宗教と社会」学会、平成二十五年）などがある。

## 追記

本稿は、平成三十年度・日本民俗学会第七十回年会で研究発表した「現代の『天下祭』に関する予備的考察―神田祭と山王祭の都市祝祭論へ向けて―」（於駒澤大学、平成三十年十月十四日）のレジュメをもとに大幅に加筆修正したものである。